

美濃・瀬戸 名品生む

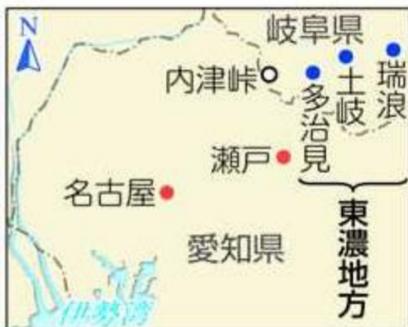
第6部 陶磁器を世界へ 〈3〉

時流の先へ

中部財界ものがたり

狭く険しい坂道をあえぐように荷馬車が上る。荷台の木箱には「白生地」と呼ばれる絵付け前の白い焼き物がぎっしり。馬一頭では重い陶磁器を引いて上れない。運送業者は後続の馬車を待って二頭で峠まで上り、戻ってもう一台を再び二頭で引き上げた。坂道を踏み外し、川に落ちて命を落とす業者もいた。

岐阜県多治見市の内津峠。東濃と名古屋を結ぶ下街道の最大の難所だ。陶磁器の歴史に詳しい陶芸家高木典利(六八)は多治見市在住



大倉孫兵衛の指導で、洋風のデザインに取り組んだ明治期の森村組の絵付け工場＝森村組の社史から(撮影年、場所は不明)

岐阜県東濃地方から愛知県瀬戸市にかけての地域は、国内最大規模の陶磁器の産地だった。森村市左衛門が起こした森村組(現森村商事)も美濃や瀬戸から白生地を仕入れ始める。絵付け工場は、東海道線が通り、交通の便がよい今の名古屋市東区榑木町に構えた。

森村組は発足当初、ニューヨークで古美術品を売った。だが、数に限りがあった。「陶磁器は壊れやすく買い替えが多い。きつと商売になる」。こう考えた市左衛門は、一八八〇年代後半ごろから、独自に絵付けした新品の陶磁器へと品ぞろえを変えていく。

当時の技術の高さを物語る「証拠の品」が高木の自宅にある。森村組へ白生地を納めていた業者が多治見の窯で焼き、名古屋へ運ばれないまま残った貴重な「大きい」と語る。



大倉孫兵衛

森村組で仕入れや絵付け工場の設立に尽くしたのは、市左衛門の義弟の大倉孫兵衛だった。東京から瀬戸、美濃へ仕入れに直接出向き、白生地の商社と交渉

大倉孫兵衛(おおくら・まごべえ)1843(天保14)年に江戸・日本橋の絵草紙屋に生まれる。65年に森村市左衛門の異母妹ふじと結婚し、市左衛門の義弟となった。市左衛門より4歳年下。76年に市左衛門と弟の豊がつくった森村組に最初の社員として入社し、仕入れなどを担当した。93年に米シカゴで開かれた万国博覧会を視察し、洋風絵付けへの変革や、絵付け工場の集約化に当たる。1904年に市左衛門や長男の和親(かずちか)らとともに今の名古屋市西区則武新町に日本陶器(現ノリタケカンパニーリミテド)を設立、陶磁器の品質向上の研究などに努めた。21年に78歳で死去。

洋風の意匠 巧みに模倣

する。東京や京都に散らばっていた絵付け職人を、白生地の生産地に近い名古屋に集める。絵付けのデザインも和風から、米国で好まれるスミレなどを描いた洋風に変えた。

保守的な日本画専門の職人たちは洋風絵付けに反発したが、大倉は熱心に教え続けた。森村商事の社史で、大倉は「難しかったのは、職人に売る品をこしらえることを教えることだった」と振り返っている。

市左衛門の言葉を残した「森村翁言行録」で、市左衛門は「大倉さんは陶器などの製造と意匠図案に独特の才能を持ち、森村組を発展させる最も大きな力となった」と大倉をたたえている。

白生地に対する大倉の検品は厳しかった。高木は「当時の窯元は『森村組の仕事は割に合わない』とぼやいた。しかし、だからこそ海外で売れたんだ」と力を込める。大倉のひ孫で、東京に住む渡辺弘雄(ひろお)は語る。「経営の森村、製造の大倉という役割分担で、森村組は拡大していった」(文中敬称略)